

白雪姫

絶望の壁を乗り越えて

山口二郎

(教育総研・希望社会研究委員会)

白雪姫	浜矩子
女王	竹信三恵子
鏡	金井利之
希望人	竹信三恵子
希望人	山口二郎
希望人	川内博史
希望人	木村朗
希望人	桜井智恵子
希望人	金井利之
カベゾウ	川内博史
キザオカ	山口二郎
フミカ	伊藤書佳
生徒1	木村朗
生徒2	金井利之
王子	桜井智恵子
進行役	杉 正太郎
ぬりかべ	石塚さとし
カベの声	梅本修
カベの声	下坂千代子
家族のカベ	岡島正樹

M (音楽) 「禿山の一夜」

V (映像) 「鏡の前に座り自分をうっとり眺めるカベ女王」

女王 「鏡よ鏡、世界でいちばん美しいのは、だあれ？」

鏡 「白雪姫でございます」

(スクリーンに経済書を読みふける白雪姫の画像が出る)

女王 「あっ!?!? 白雪姫? 私より年上のあの白雪姫? どうしちゃったのよ? 美しい国を取り戻した私がいちばん美しいに決まってるんじゃないの!」

鏡 「女王は、いささかアンチエイジングに励みすぎてしまわれたかと…」

女王 「うるさい、うるさい! いまいました白雪姫め、経済書をなど読みふけて! 日本に送って過労死させてやるわ」

(鏡をこずく女王)

S (スライド) 「201x年の日本は妖怪ぬりかべが突然変異を起こし増殖した」

下手より 進行役登場

進行役 「こんにちは、衝撃的に始まりましたこの物語の進行役を務めさせて

頂きます杉正太郎と申します。どうぞよろしくお願いします。

さて白雪姫が追いやられた日本は、妖怪ぬりかべが突然変異を起こし増殖中でした。ヤベーノミクスで景気がよくなったと一部の裕福な日本人が浮かれている間に、そして、大半の日本人が諦めと無関心を決め込んで日々ボーとしている間に、様々な形で爆発的に増殖し始めたのです。そして、人々の、とりわけ若者や子どもの方方を遮るようになりました。この妖怪は、普段は目に見えない。しかし、ないと思っただけに進むと突然ぶつかると。壁をよけようとして横に動いても、カベは無限に広がるので、たちが悪

い。一つの壁が次の壁を作り出すというようにして、ぬりかべが世の中に広がると、あちこちで袋小路ができてしまったのでした」

進行役 下手ハケ

S (スライド) 「公園のベンチ」

上手より白雪姫登場

白雪姫

「ああ、何と！ 着の身着のまままで追い出されてしまった。もう、これじゃ過労死どころじゃないじゃない。こんな格好じゃ、ワーキングプワにさえ、なれはしない。……とはいえ、何とかせねば。でも、その前にちよつと一杯……じゃなくてちよつとお休みしちゃいたい……。あれ、何これ！ おかしい！ 前へ進めなーい」

下手より「仕事の壁」が登場

仕事の壁

「私は、仕事の壁。グローバル化とIT革命こそ、私の大好物。昔の日本では、終身雇用制なんて言う古臭い仕組みがあつて、人間は一つの会社で定年まで働くことが美徳だなんて言われていたわ。だから、サラリーマンは、会社の家畜、つまり社畜なんて言われてた。嫌な上司にいじめられてもじつと我慢するしかなかった。でも今は違う。規制緩和のおかげで、働く人間はみんな自由になれたのよ。労働市場の自由化と柔軟化こそ、人間が楽しく生きるための素晴らしい改革。それから、昔は長々と残業するのが当たり前だったけど、今では残業なんて言う言葉もなくなった。働いた時間で給料を計算するのではなく、仕事の成果に応じて給料を払う。そうするとみんなテキパキ仕事を仕上げて、早く家に帰るようになったわけ。ついでに、女性が輝く素晴らしい時代が到来したのよ。今では女でも管理職になつて、バリバリ仕事ができるようになった。

それから、IT化は、仕事の世界を変えたわ。たいていの仕事は機械がしてくれる。人間は、人間にしかできない仕事をすればいい。そう、みんなが独創性を発揮して、趣味と仕事が一

体になる。働くことはもはや苦労でも辛抱でもない」

客席下手ドアより「♪ハイホーハイホー 希望が好き」と歌いながら

希望人三恵子を先頭に希望人二郎・希望人利之

希望人朗・希望人博史・希望人智恵子の順で登場

希望人三恵子

「あーあ、これだから壁は無知だって言われるのよ。独創的な発明は、普通の働く人たちとの多様な交流の中で生まれてくるものよ。それに、そうした発明を生かして使い勝手のいい製品に仕上げていくのは普通の働き手。知恵を使ってそれを売るのも普通の働き手。普通の働き手がボロボロな国に独創的な発明も何もあったもんじやないことを知らないなんて、独創的な発明をしたこともない壁にはわからないのよね。それに、自由な競争が聞いてあきれるわよ。たまたま景気がいいときに経営者だったから業績が上がっただけなのに『俺の経営がよかったからだ』とか言って報酬を釣り上げてる経営者までいるらしいし。ピケティという学者が『それって業績じゃなくて幸運の対価に過ぎないよ』と言っているのを知らないの。そもそも普通の働き手にお金が回らなくなったら、その国の経済はそれこそボロボロ。それもわからないなんて、壁を洗って出直しておいで！」

下手に「仕事の壁」退場

白雪姫

「そう！全くおっしやる通り！」

希望人三恵子

「あら、見かけない顔ね」

白雪姫

「こんにちは。白雪姫と申します。(観客席に向かって) ホントは紫雪姫ですけど。もう、私、カネ無し・職無し・お家無し。要はホームレスなんです(ご)ざいます」

希望人三恵子

「私は希望人三恵子よ。この国には、困った人が入れる公営住宅や、いざというときの安全ネットである生活保護とかもあるんだけど、壁たちが出没するようになってからどんどん減らされてしまっただけ。だから私たち、仲間同士の連帯で、公園にテントを張って助け合って暮らしているの。今晚はとりあえず、そ

ここに泊まるといういわ

白雪姫

「なんと嬉しや！あーりがとうございます！」

(希望人ひとりずつ自己紹介)

希望人二郎・希望人利之・希望人朗・希望人博史・希望人智恵子の順で

希望人三恵子

「さあ、行きましょう！」

希望人「♪ハイホーハイホー 希望が好き」と歌いながら歩く

S (スライド)「公園の道」

希望人三恵子

「さあ登りますよ、あら前へ進めない？ どうしたんだらう？」

上手より「格差の壁」が登場

格差の壁

「私は格差の壁。仕事の壁のおかげで、私もおおいばりで大きくなれた。人間の能力には格差があるのが当たり前なのだから、みんなが自由に行動すれば、給料や暮らし向きにも格差があるのが当たり前。でも怒っちゃダメ。なんて言っても、金持ちはず世の中全体にとって、金の卵を産むガチョウなのよ。格差が嫌いで妬み深い庶民とやらが金持ちに嫉妬して、金持ちを大事にしなくなったら、みんな貧乏になるだけよ。それでもいいの？金持ちが富を蓄えたら、それはぼたぼたと下の方にも滴り落ちる。貧乏人もおこぼれにあずかれるっていうわけ。三〇年以上前に、中国の鄧小平というすごいリーダーが、まず豊かになれるところから発展していこうという素晴らしい政策を考え出した。日本のあほな左翼は、なんで中国共産党のこの政策をまねしないのかしらね」

希望人二郎 前に出る

希望人二郎

「格差のカベが言っていることは、事実には反するよ。日本では、二〇〇〇年代に入って、雇用の規制緩和が進む一方、法人税の減税も進んで、企業の収益が増加しても、労働者の賃金はずつと減っているんだ。富をため込んだ会社や金持ちは、決して下

の方にしずくを垂らしてはくれない。これからどんどん貧乏な人が増えていったら、誰が買い物をしてくれるんだい。つまりもうけそこなっている状態は格差のカベさんも困ると思うでしょう」

上手に「格差の壁」退場

希望人二郎

「あれ？壁がいなくなりましたね。まだ議論の途中だったのにまあ、白雪姫もお疲れでしょうから、公園へ向かいましょうテントにはおいしい豚汁やおむすびもありますから」

希望人「♪ハイホーハイホー 希望が好き」と歌いながら

下手から上手へuターンする

希望人二郎

川だ！

希望人たち 切り株を置いて渡る

下手より「家族の壁」が登場

家族の壁

「私は家族の壁。家族の絆さえあれば、福祉とか、そんなものはいらぬ。『美しい国』は、国や企業に文句言っていないで、家族が支えればよいんだ」

希望人利之 前が出る

希望人利之

「そんなことを言っているから家族が壊れているんだ。家族が支え合いをできるようにするために、国や企業は家族を助ける義務があるのだ」

家族の壁

「結婚したり家族を持ったりするのは本人の自由だ。貧乏人が金がなくて結婚できないとか子どもを持たないとか言い訳するのは、本人の我儘な甘えだ」

希望人利之

「本人が自分の希望する結婚や家族を実現する自由のためには、仕事のカベや格差のカベを壊して家族のカベをなくす必要が

あるのだ」

家族の壁

「大体、昔から貧乏人の子たくさんなんだ。貧乏人は、そもそも社会のお荷物なんだ。他に何の役にも立たない貧乏人は、ダマス君が言うように、『産めよ殖やせよ』で、出生率回復して、『次世代の徒党』をどんどん作って、金持ち1%の下支えをするために貢献してろ」

希望人利之

「そんなことを言っているから少子化して、日本人が減っちゃうんだ。日本人の消滅が、家族のカベの希望か？」

家族の壁

(イライラして)「うるさい、大体、人間は、カベゾウ君のように上級家系から生まれた二世三世と、その他雑草のようなクズと、生まれたときから決まってるんだ。家族のカベは身分差別のカベだ！クズのくせに文句を言うな。文句があるなら、シンデレラみたいに婚活して王子様を見つけて玉の輿にでも乗ればいいんだ」

希望人利之

「生まれたときが決定的に大事で、二世三世が最高権力者になっているのは、あっちの国とこっちの国くらいだ。カネ目当ての婚活がひろまるのは、『醜い国』であることに気付かないのか」

下手に「家族の壁」退場

希望人利之

「いなくなりましたね、さあ、行きましょう」

希望人「♪ハイホーハイホー希望が好き」と歌いながら客席に降りていく

客席下手ドアより 「情報の壁」登場

希望人たち

「うわっ」

情報の壁

「私は、情報の壁。私は、IT革命と格差貧困の壁のおかげで、大きくなれた。昔は普通の人はみんな新聞を読んで世の中の動きを知っていた。しかし、ITの時代、紙の新聞、雑誌、

本はみんな終わり。夕暮新聞という、いつもおかみに楯突く邪魔くさい新聞も、誤報を垂れ流して、すっかり信用を失った。自業自得だね。

最近、お馬鹿で下品なオヤジがカベカベ放送の会長になったおかげで、あそこにいた骨のあるとか目障りなジャーナリストとかいう人種も、すっかり追い出されて、今やテレビは政府の報道機関のようなもの。ついでに今の政権ができたすぐ後に、特定秘密保護法ができて、国益のための情報管理もばつちり。テレビは、視聴率を稼げるバラエティばかり。何が悪いの。視聴率が高いということは、みんながそれを求めているということでしょう。視聴者が面白い番組を選ぶ権利を持っているのよ。

仕上げはネットの全盛。どんな貧乏人でも、スマホだけは持っている。いつでもどこでもスマホを見ている。ネットの広がりこそ、自由と民主主義の友だち。新聞や雑誌で偉そうに説教していた大学教授なんというごくつぶしたちも、今では大学改革のおかげでいなくなった。それも自由で平等なメディアを作るためには大いに役立つたわよ。

今ほど情報があふれかえって、みんなが簡単に物事を知ることができるようになった時代はなかった。素晴らしいじゃない」

希望人朗 前に出る

希望人朗

「いまの日本はみんなが思考停止状態だよ。それが権力とメディアが一体化した情報操作の怖さだと思うよ。メディアの劣化は本当に目を覆うばかりだけど、真実に近づくことはその気になれば意外に簡単さ。政府や大企業が組織防衛や保身のために平気で嘘をつく。そして大手メディアは必ずしも真実を伝えない。それを知ることが最初の一步だよ。ソーシャルメディアのような市民による対抗メディアも生まれているし、気骨のあるジャーナリストもいるのでまだ希望は十分あるよ。僕らの最大の敵無知というよりも無関心だよ。ジョージ・オーウェルが『1984年』で予言したような倒錯した狂気の世界にさせないためにも、『騙される者の責任』を意識して情報を主体的かつ批判的に読み解くことが何より一番大事だ

よ」

客席下手ドアに「情報の壁」退場

希望人朗

「いったいななんだ、今日は！ 白雪姫、もうすぐだから、がんばって。テントにはおいしいワインもありますよ」

白雪姫

「ああ…それさえあればわらわは満足！たくさん、ある？」

希望人朗を先頭に「♪ハイホーハイホー 希望が好き」と歌いながら

客席4列目を横切りステージに向かう

希望人朗

「ここを進めば、おっと！」

S (スライド) 「国会議事堂」

下手よりステージ中央に「政治の壁」登場

政治の壁

「私は政治の壁。格差の壁と情報の壁のおかげで、今まで私を封じ込めてきた国民主権という危険思想はすっかり消え失せた。おかげで、私も急成長できた。二〇年ほど前に、政権交代という奇天烈な夢を追いかけたバカな連中がいたけれど、長年日本を守ってくれたあの政党を追いやった後に何が起こったか。ひどかったよね。政党には、国を治めるにふさわしい一つの政党と、その政党にいちやもんをつけるへそ曲がりの少数党の二種類があればいいんだ。本当は少数党はなくてもいいんだけど、政党が一個しかないのは、外国に対してちよっとみっともないから、もう一つ小さいのがあればいい。それこそが日本の民主主義。」

選挙で勝てば、何でもできる。多数決とはすばらしい仕組み。総理大臣は国民が選んだ政党の指導者だから、総理大臣のすることは国民の望むこと。それに反対するなんて、民意を否定することだ。選挙は、政治を一握りのエリートに任せておくための仕組み。国民の務めは、決める人を選ぶところまで。後は、国民が選んだ決める人が、どんな物事を決めてくれる。強いリーダーのおかげで、景気

はよくなり、国民は安心して暮らせる」

希望人博史 前に出る

希望人博史

「あなたは、本当に選挙で勝てば何でもできる、と思っているのですか」

政治の壁

「だって、選ばれたんだもの、やりたいようにやるよ」

希望人博史

「じゃあ、選挙も民主主義もあなたの為のものなのですか？」

政治の壁

「あからさまには、言えないけど、そういうことだねえ。」

世の中の全てのものが、私に奉仕すれば良いのだよ。

私を批判する者達には、『この左翼め』あるいは『テロの味方をするのか』と言いつ返せばみんな黙るから最近では楽だねえ」

希望人博史

「全国民のうち、二〇%にも満たない人達しかあなたに投票していません、そういう切れるのですか？」

政治の壁

「だって、それがルールでしょ」

希望人博史

「まさしく、それがルールです。政治や選挙や民主主義がゲームであれば、あなたは勝者です。でも、政治も選挙も民主主義もゲームではなく、全ての人々に関わる現実です」

政治の壁

「うるさい、うるさい生意気な奴め、そんなことを言っているから、おまえは選挙に落ちるのだ」

希望人博史

「いいえ、私は言わせてもらいますよ。」

『テロとの闘い』とか『集団的自衛権の行使』とか『原発再稼働』とか『TPP』とか、あなた方が『全力を尽くした』だの『戦争はしない』だの『汚染水はコントロールされている』だの『景気は良くなっている』だの、どれだけ嘘をついて、特定秘密保護法で情報をコントロールしても、大多数の国民は、生活が安定せず将来に不安を抱え、あなた方のやる事を、白けた目で見ているのを知らないのですか？

あなたは、回りに本当のことを言ってくれる人がいないのでしょ
う」

政治の壁

「本当のこととは、何だ。言ってみろ」

希望人博史

「あなたが『裸の王様』だってことです」

政治の壁

「何、私が裸？ ママ、お腹が痛くなって来たよ。ボク、お
家帰る」

下手に「政治の壁」退場

希望人博史

「ふー、こんなふうにいるところに壁がでてくるようにな
ってしまった」

白雪姫

「うーん。かなり事態は深刻ですねえ。ですが、ここで諦めるよ
うじゃあ、希望人の名がすたる。全てはこれから！」

希望人博史先頭に「♪ハイホーハイホー 希望が好き」と歌いながら
ステージ上がる

S (スライド) 「夜の公園」

希望人博史

「さあ、ようやく着きましたよ。白雪姫、今日はたくさん食べ
てゆっくり休んでください」

希望人たち

「そうしてください」

暗転

希望人 下手ハケ

上手より進行役登場

進行役

「その夜希望人たちのテントでは宴会がくりひろげられ」

希望人たち (歓声)

進行役

「すっかりみんなと意気投合した白雪姫は、いっしょに壁を打ち崩す企てを練ろうと話しあって、眠りにつきました」

S (スライド) 「ケケケ小学校教室」

進行役

「白雪姫は希望人智恵子の紹介で非常勤講師の職を得て、ケケケ小学校で6年1組の副担任として働くことになった」

進行役 上手退場

下手より 希望人智恵子とともに子どもたちに挨拶しようとする白雪姫

白雪姫

「みなさん、こんにちは！私、白雪姫と申します。(観客席に向かって) ホントは紫雪姫ですけど。本日からこのクラスの副担任になりました。……うん？あれ？何と！みんなに声が届いていない！」

上手に「教育の壁」退場

教育の壁

「私は教育の壁。私こそ、カベの中のカベ、壁の大トリ、ぬりかべ族の女王。いろんな壁のおかげで、とうとう私も学校の中に、子どもたちの間に、広がることができた。この二十ほど年の教育改革は素晴らしいわね。まずは、グローバル人材の育成。小学校から大学まで、グローバルに活躍できる人間を育てることに一生懸命になった。まずは小学生から英語を教えて、外国でハンバーガーを食べるときにもあわてずに済むようになったし。大学では、グローバル化の呪文の効果てきめん、お上に楯突いていた学者どもも今ではみんな政府の言うがまま。所詮学問なんて、金儲けの道具だわ。」

次は、道徳教育。少し前までは、いじめや少年犯罪がたくさん起こっていたでしょう。だから子どもにしっかりと道徳を教えるようにしたの。おかげで先生や偉い人の言うことをしっかりと聞く良い子が増えてきたわね。」

みんなが言いつけを守る良い子になったら、日本の未来は絶対安心。私たちぬりかべも永遠の命を得られる」

希望人智恵子

「二十年どころの話じゃないじゃないですか。前の戦争が終わってからさらに教育、教育っていつて、子どもが自分で考える機会や時間のじゃまをしつづけて。」

社会や教育の基準で、能力のある子とない子に分けられて、それが自分の価値だと思おうようにさせられてる子どもたちのこと、考えてみたことありますか？ そもそもよい子ってどんな子？ 能力ってなんなんでしょう？ どんなに暗唱してもセリフを忘れちゃう子の忘れる能力は、忘れる能力が高いって言われないの、不思議すぎます」

上手に「教育の壁」退場

下手に 白雪姫・希望人智恵子退場

SE (効果音) 「チャイム」

上手より 進行役登場

進行役

「壁は学校の中にも侵入し、たくさんの子どもが袋小路に追いまれ壁にぶつかる。そして立ち止まる。しかし、中には変わった子もいる」

下手より フミカ登場

フミカ (壁にぶつかる)

「ぬりかべって、『ゲゲゲの鬼太郎』の中では、鬼太郎を助ける良い妖怪だったのに。なんで今のぬりかべは私たちにこんなに意地悪なんだろう。壁の向こうには何があるのかなあ」

進行役

「壁の向こうについて考えるきっかけは、意外なことから訪れた。この学校で、創立七〇周年を記念して、新しい子ども宣言を作ることになった。生徒会長のカベゾウ君は妙に張り切ってる」

上手より カベゾウ登場

カベゾウ

「ずっと前の先輩が隣の学校の子どもをいじめたからといって、いつまでもうちの学校の生徒がいじめっ子というレッテルを貼られるのはおかしい。ボクは未来嗜好の宣言を作りたい。ついでに、3組はボクに楯突くオナカを学級委員に選びやがって、あんな連中はうちの学校の生徒じゃないから無視しちやおう」

進行役

「すると、学校きつての秀才、キザオカ君も加勢した」

上手より キザオカ登場

キザオカ

「昔の先輩と僕たちは別人格だ。それを一緒くたにするのは、悪しき集団主義的発想だよ」

進行役

「さすがに学校きつての優等生は難しい言葉を使う。話を聞きつけた非常勤の白雪姫が駆け込んできた」

下手より 白雪姫登場

白雪姫

「ちよつとあんたたち！アホな宣言をするつもりじゃないでしょうね。偉そうな顔して、いい気になるんじゃないよ。もう、これ以上他校の生徒を怒らせたら、この紫雪姫が承知しないよ。覚悟しな」

カベゾウ

「だからボクは最初から言ってるでしょ。うちの学校の歴史を嫌嘘に振り返って、犯性の気持ちを表現しなきゃあって」

進行役

「フミカは猛烈に腹が立ってきた」

フミカ

「カベゾウ君、あんたは子どもたちの前では偉そうにお説教するくせに、先生にはすぐにへつらうのね。サイテー。他の学校の子に向かって威張ったり、同じ学校の仲間をのけ者にしたり、そんなあんたが子ども宣言なんて、笑わせるよ」

進行役

「政治のカベが顔をしかめた」

政治の壁

「私は、この怒りが苦手なんだ。怒りはせつかくぬったこの壁にひびを入れる。痛い」

暗転

V (映像)

「鏡の前に座りるカベ女王」

女王

「さあ鏡よ、鏡。白雪姫がいなくなっただいま、世界でいちばん美しいのはだーれ？」

鏡

「それはいまも変わらず白雪姫です」

女王

「なんですって？ 白雪姫め！ まだ生きていたのか！ 壁たちの元締めたる美しい国の女王の私が、せつかく日本を壁で囲んで身動きを取れないようにしてやったのに！」

鏡

「しづとさが白雪姫の美しさです」

女王

「今度こそ息の根を止めねば」

S (スライド) 「ケケケ小学校教室の給食」

上手より 順番に立つ

白雪姫・フミカ・生徒1・生徒2・カベゾウ・キザオカ

白雪姫

「それではみなさん、いただきますよう！」

生徒たち

「いただきます」

下手より

給食の調理員になりましたカベの女王が登場

給食の調理員

「はい、白雪先生のリンゴですよ」

白雪姫

「ありがとうございます！リンゴ酒だといいんだけどね」

上手に スーツと立ち去る調理員

白雪姫

「うつ……」

りんごを食べて倒れる白雪姫、駆け寄る生徒とフミカ。

気にせず自説をかますカベゾウ

カベゾウ

「ぼくのおじいさんは町の最高実力者だったんだぞ。お父さんは最高実力者になる直前で死んじゃったけど。だから僕がこの学校の最高実力者になるのは当たり前なんだ」

フミカ

「何が当たり前なのよ。そんなこと、誰がどこで決めたんだ」

上手に 進行役登場

進行役

「情報の壁が、耳をふさいだ」

S (スライド) 「情報の壁」

情報の壁

「まずい。当たり前について尋ねられるのが、私は一番嫌なんだ。当たり前は当たり前でいいじゃないか。たとえそれが嘘であっても」

進行役

「フミカの声は、今までうつむいていた子どもたちの顔を上げさせた」

生徒1木村

「フミカの言うとおりで。子ども宣言を出すなら、どんなものを作るのか、みんなで見解を出し合うべきだ。話し合いもしないで、生徒会長がお気に入りの人たちだけで決めるなんておかしいよ」

生徒2金井

「それに、3組のみんなには何かの思いがあって、オナカ君を委員に選んだはずだよ。3組の友達を仲間はずれにするなんて許せない。3組も入れてみんな議論してみれば、もっと素晴ら

しい宣言ができると思う」

進行役

「悲鳴上げる情報の壁・政治の壁・教育のかげ」

S (スライド) 「悲鳴上げる情報の壁・政治の壁・教育のかげ」

政治、情報、教育の壁「やめてくれー。おれたちは、仲間とか話し合いとか議論とかいう忌まわしい言葉が大嫌いなんだ。話し合いなんかや
ってたら、物事が決まらなくなるぞ」

S (スライド) 「心配顔の格差の壁・仕事の壁」

格差と仕事の壁 「あいつらがいなくなったら、私たちも消されるかもしれない。
みんな頑張って、子どもたちの前に立ちふさがるのよ」

生徒1

「あれ、カベが苦しんで、悲鳴を上げている。あんなに硬くて、
高かったカベから、ぱらぱら石ころが落ちてきた。壁にぶつか
って諦めるんじゃないかって、カベと戦う方法があるんだ」

生徒2

「そうだ、わかった。生徒会長のカベゾウも、本当は壁の向こう側
の人間だったんだ。それが僕たちにあんまりごうまんにふるま
って、いじめたり、威張ったりするから、僕たちは怒り、声を
出した。すると、僕たちとカベゾウの間にいたはずのぬりかべ
たちが苦しみ始めた。壁を崩す方法は、これだ」

生徒1、2

「みんなで、話し合い、力を合わせて、声を出す。そうだ」

M (音楽)

「メリーウイドーのワルツ」(芝居最後まで流す)

下手より マントを翻した王子が教室に入ってくる

カベゾウ・キザオカを追い払い

王子

「なんて美しい姫君なのだ。眠っているのかい？」

フミカ

「いいえ王子様、白雪姫は死んでしまっているのです」

王子

「まさか！」

王子が白雪姫に歩み寄る。倒れた白雪姫がのどにつまったリンゴを「ふうえっ」と吐いておきあがった。そして、がうれしそうに語りだした

白雪姫

「みなさん、素晴らしい！壁を倒すために必要なものは何か。それは耳と声です。私が大好きな旧約聖書の中に『エリコの戦い』という一節があります。エリコは地名です。エリコのお城は難攻不落。その城壁を倒すために、ユダヤ人たちは、何をしたか。まず、祭司（聖職者）たちが角笛を吹く。その音が耳に届くと、人々が鬨の声を上げた。すると、たちまち、壁は崩れ落ちたのです。これこそ、まさしく、今の皆さんの姿ですよ。お互いの声に耳を傾け、そして、一丸となって声を上げる。これが出来れば、どんな壁だってイチコロです。人々の良き耳と高き声。これさえあれば、必ず、壁は倒せるのです。必ず、道は開けるのです！」

生徒達、白雪姫と王子のまわりに集まる。カベゾウ・キザオカそしてカベ女王も王子に許され嬉しそうに加わる。

進行役

こうして、絶望の壁を乗り越えて、希望社会の一步が始まった

白雪姫を中心に全員が希望の彼方を見つめる

M（音楽）

「メリーウイドーのワルツ」（高揚）

暗転

明転

一同 一列になり礼（手を振るなど自由に）

暗転

完